



いとう



海援隊旗(二隻きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

胡馬 KOKA HOKUHU 北風

2011年(平成23年)は高知県立坂本龍馬記念館にとって重要な節目の年となる。昨年、まるで嵐のごとく通り過ぎたNHK大河ドラマ「龍馬伝」だが、余韻に浸る間はない。振り返ればこの19年間に館を訪れた入館者はざっと290万人。300万人がもうすぐである。安定した年間入館者15万人という目標を目標の先に捕らえた。

20周年の式典は、龍馬生誕の11月15日に、館のお隣、高知市の国民宿舎「桂浜荘」と館の下「八策の広場」を中心に記念式典、イベント行事を行うことにしている。また、20年の足跡をたどる記念誌、入館者の皆さんが龍馬に宛てて書いた手紙「拝啓龍馬殿」の平成18年以後のものを一冊にまとめ、龍馬の乙女姉さん宛の手紙、また、熱烈的な龍馬ファンである台湾の李登輝元総統、孫正義ソフトバンク社長、らの手紙も掲載することになっている。このほか一年をつないでいくイベントなど20年ならではの作戦を現在検討中である。

開館20周年、目指す

龍馬発信基地

アメリカでシンポジウム 本場の「自由・平等」語り合おう

企画展、イベント、記念誌発行なども...



誰でも命は一つ

さて、20周年の総仕上げの核となるのは企画「風になった龍馬VOL.3―時代は未来へ―」。龍馬・海舟・万次郎。幕末を駆け抜け、明治維新の原動力となった3人が頭に描いた理想の世界は1850年代の自由と平等を謳歌していたアメリカである。身分差別のない民衆から指導者を選び出される「プレジデント」の世界であった。龍馬はアメリカに届かなかった。今回は子孫がそれをかなえる。3人の御子孫と、先に選出した2人の高校生、龍馬の曲を作る作曲家・シンセサイザー奏者の西村直記さんらも同行する。ただし事情は大きく変わっている。アメリカも日本以上に芯が揺れている。いや、アメリカだけではない、地球全体の軸さえ危うい。核廃絶、地球温暖化防止、飢餓、吹き荒れるテロ戦争。自由・平等の向うにある平和社会実現に、人類は出来る範囲での努力を惜しんではいけない。風になった龍馬VOL.3ではアメリカに渡って共に本場の自由・平等について語り合い発信したい。「人間誰でも命はひとつ」(EVERYONE HAS ONLY ONE LIFE)である。これが龍馬記念館の基本でもある。

森 健志郎

会場包む熱気 語り草にも

風になつた龍馬「時代の力」シンポジウム

11月14日夜、高知市民プラザ「かるぼーと」を会場に七五〇人の参加者とともにシンポジウムを開催した。テーマは「時代の力」。昨年から開催する「風になつた龍馬」の第二弾である。

今回、昨年の「子孫は語る」時代の不思議」というシンポジウムは大きく枠を広げて3部構成となった。第一部「子孫たちが語る」時代の力」、第二部「大河ドラマ『龍馬伝』パブリックビューイング」、第三部「座談会」明日へのメッセージ」である。

『龍馬伝』を午後8時のオンタイムで観るという第二部を基準に設定した3時間の開催であったが、予想以上に時間は早く感じられ、内容の深さに感動の輪が広がった。また、ツイッターたちの参加という新しい試みにより、インターネット公開もされた。多彩な出演者や内容に、今回のシンポジウムは始まる前から期待と興奮に包まれていた。

《第一部》 高校生、パワーさく裂!

「風になつた龍馬」では龍馬、勝海舟、ジョン万次郎の三人を検証しながら、彼らのメッセージを探っている。三人の子孫たちは「時代の力」について語った。「地球は宇宙の中の一艘の船である、地球は宇宙船地球号。私たちは日本丸の乗組員だ」(郷土坂本家九代目・坂本登さん)、



高校生も加わって! (かるぼーと)

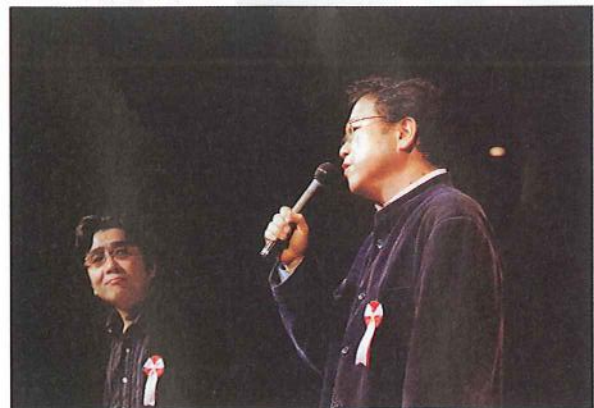
「個人の力は小さいが結集すれば時代を変える大きな力となる。まず状況を知ることが大切」(勝海舟子孫 高山みな子さん)、「万次郎の学んだ『隣人愛』を伝え、一人でも多くの方に勇気や夢を持っていただきたい」(中濱万次郎五代目・中濱京さん)。今回も子孫の思いは熱い。

また、六月と七月に開催した高校生上セミナー「われら海援隊!」参加者四〇人の中から選抜したアメリカカフォーラム派遣者、大石すみれさん(高知県立嶺北高校一年)と宜保然樹さん(土佐高校一年)の二名も参加。

「県の山間部・嶺北地方は高齢化と過疎が進む地域ですが、素晴らしい私のふるさとです。私は嶺北の龍馬」になりました(大石さん)。「私は今、高知市で下宿生活を送っています。ふるさととは持

《第二部》 「龍馬伝」にかける制作者の思い

パブリックビューイング前にはNHKチーフプロデューサー・鈴木圭さんと同ディレクター(監督)・大友啓史さんが会場を大いに盛り上げた。「ドラマで一年間龍馬と走って来て、我々は本当に大切な人を失ってしまったんだ」ということを感じていた。改めて龍馬の偉大さや人間的な魅力、懐深さを思う。大切な人を失ったから、今大変なことが起こっているんじゃないか。龍馬さんに生きてほしいとスタッフはみんな思ってた」(大友監督)、「福山さんも龍馬になりきって死にたくないと言っていた。龍馬がのり移ってる感じだった。またノンストップで長時間



軽妙に掛け合う大友(左)・鈴木(右) (かるぼーと)

原町という山深い町。育ててもらった地域に貢献したい」(宜保さん)。二人の女子高生はさわやかな笑顔と堂々とした発言に会場内外から大きな拍手が起った。

「今回は大河ドラマという既成の枠組みを壊すような新しいことをやろうと、龍馬の志のようなパワーがスタッフに伝播していた」という撮影現場の話や、制作者としての思いなど次々と飛び出した。

この日の「龍馬伝」は第46話「土佐の大勝負」。土佐藩を大政奉還へ向かわせようとする龍馬が、久しぶりに土佐に帰る話だ。「龍馬伝」応援隊長・孫正義さんの「いくぞ」というかけ声で、上映が始まった。

《第三部》 孫正義「人間の原点」を語る

森館長の司会による、孫正義・ソフトバンク社長と尾崎正直・高知県知事の座談会。

「ズバリ孫さん、あなたにとって坂本龍馬とは?」という館長の問いかけに、孫さんは「人生の転機、節目、決断のとき、私は『龍馬がゆく』を何度も読み返し、あらゆる龍馬の本を読んだ。もし龍馬さんに出会っていなかったら僕の人生が違ったものであったことは間違いない」と答えた。十五歳で「龍馬がゆく」を読んで十六歳で高校中退そして渡米。龍馬が人生を決断



右から孫社長・尾崎知事・森館長が燃えた! 第三部 (かるぼーと)

させたと言言する。

一方、尾崎知事も「生まれたときから龍馬の空気を吸って生きてきた。中二のときに読んで『龍馬がゆく』はメモをとりながら読んだ。日本の中でも一番貧乏だと言われる高知県だからこそ、やってやる。高知でこんなことができたというところを見せたい」と、知事としての意気込みを見せた。

「一緒に愛する人たちと感動を分かち合う喜び」が幸せだと言う孫さん。十六歳で渡米したとき、家族は生活困窮や病気という危機の中にあつた。それでも家族を振り切つて将来に懸けたという、ありのままの自分を語る孫さんの話は心深く響いた。孫さんの「ITは人類の幸福のためにある」という言葉に集約されるように、今回のシンポジウムが世界発信への第一歩だと確信できた。

この日、確かに龍馬の「風」が吹いた。その風は嵐のように力強かったが、春風のようなすがすがしさが残った。「感動した」「3時間があつたという間だった」「涙が出た」。シンポジウム終了後、電話やメールが止まなかった。それらはまさに記念館へのエールだつたと思う。

前田 由紀枝

熱い二日間、パワー全開で走り始める 孫さんと龍馬の史跡巡り

シンポジウムの翌日、龍馬の誕生日にソフトバンク社長・孫正義さんを案内して、高知市内の龍馬の史跡を巡った。前日のシンポジウムで、龍馬に対する思いを熱く語られていたが、史跡巡りもその勢いのままに、熱いものとなつた。



和霊神社の宝刀を見る孫社長(龍馬記念館)

撃の跡が多数残っている上、柄の部分はよほど強く握っていたようで、少し手の形にくぼんでおり、相当激しい稽古をしていたことが想像できる。

護国神社に着くと、孫さんは早速白手袋をして木刀を握り、素振りをはじめられた。ご自身も北辰一刀流を習っていたそう、堂に入った素振りを暫く行っていた。横で見ていると、素振りをすることに、まるで龍馬と同一化していくような気がした。

素振りを終え、神社にお詣りし、帰途につくかと思われたその時、孫さんは、「もう一度木刀に触りたい」



龍馬の使った木刀を振る孫社長(護国神社)

とおっしゃられた。しかも今度は「素手で触りたい」と。「本当は頬ずりしたいけど、触るだけで」と熱くお願いされ、神社の方も特別に許可してくださった。今度は素手で握って、じつと目を閉じ、龍馬に思いを馳せられていたが、閉じた目からは涙が溢れてきた。

三浦 夏樹

龍馬活躍の陰にこの男あり

龍馬の先を駆けた男「吉村虎太郎」展

平成23年1月11日(火)～3月31日(木)

「吉野山」

風に乱るるもみぢ葉は
わが打つ太刀の血煙と見よ」
(虎太郎辞世の句)

私と吉村虎太郎との出会いは今から6年前のことです。龍馬記念館のバスツアーに参加し、吉村虎太郎の銅像を訪れました。季節は秋、銅像周辺の木々は真っ赤に紅葉し、はらはらと舞っていました。そこで虎太郎が最期に詠んだ詩を知りました。純粹にこの国のことを想い守ろうとした虎太郎は若くして散っていきませんが、彼の行動は、坂本龍馬ら後に続く多くの志士たちの原動力となったことは間違いありません。今回の企画展では、龍馬の先を駆けた知られざる志士、吉村虎太郎にスポットをあてて紹介します。



さっそうと立つ吉村虎太郎の像(津野町)

中止、天誅組は拳兵の大義名分を失った。9月27日、追討軍に追い詰められた虎太郎は銃撃を受け絶命。享年27歳。

庄屋・吉村虎太郎

土佐の庄屋出身の吉村虎太郎は土佐藩脱藩第1号である。文久3年(1863)8月13日、孝明天皇の大和行幸が決定すると、その先鋒として大和へ入り天皇をお迎えするため、翌14日同志を集め天誅組を結成した。17日、幕府の直轄地であった五條の代官所を襲撃し、桜井寺に新しい政治機関として「五條御政府」を樹立。しかし、翌日事態は一変する。「八月十八日の政変」である。薩摩と会津の画策により、長州勢と尊攘派の公卿が御所から追放されたのだ。これにより天皇の大和行幸は

今回の展示では、吉村虎太郎がなぜ、いち早く土佐を脱藩し大和拳兵をするに至ったか、その心中に迫りたい。その原点は天保年間に結ばれた庄屋同盟にみられる。虎太郎ら庄屋は、自分たちは天皇直属の家臣であり、天皇から土地・人民をあずかっているという自信と誇りを持っていた。当時の幕府には諸外国から日本を守るほどの武力も技術もなく、虎太郎は、自分こそが天皇の国を守るための先駆けとなるべきだと考えていたのではないだろうか。



虎太郎着用した血染めの肌襦袢(西尾補造氏所蔵)

ゆかりの地から虎太郎資料
京都土佐藩邸資料も

虎太郎が高取城下に夜襲をかけた際、味方が発砲した弾が誤って虎太郎にあたり負傷する。その際、着用していた血染めの肌襦袢を、今回お借りすることができた。他にも、敗走中の虎太郎が置ってくれた家にお礼として残っていた銀の陣中簪や、天誅組出発の図、また、坂本龍馬が姉乙女に宛てた「虎太郎の死を惜しむ手紙(文久3年秋頃)」などを展示する。

虎太郎関係の資料は、終焉の地である奈良県に残っているものが多く、虎太郎展開催を知ってご連絡をくださった「維新の魁・天誅組」保存伝承・顕彰推進協議会の方々には、書籍や資料提供等、多くのご支援をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

また、一昨年に県が購入した京都土佐藩邸資料にも吉村虎太郎の大和拳兵に関する調書があり、幕府の視点からも天誅組、吉村虎太郎を見るなど、これまでになく展示したいと考えている。

尾崎 由紀

関連行事

昨年10月、津野町高野の廻り舞台で行われた農村歌舞伎「虎太郎魁大和錦」の高知公演決定!



「虎太郎魁大和錦」の一場面

●農村歌舞伎
「虎太郎魁大和錦」
2月5日(土) 18時開演
春野ピアステージ大ホール
入場無料

●虎太郎の郷から出張イベント
●花取り踊り
1/23(日)・2/27(日)

●津野山古式神楽
2/13(日)・3/13(日)

【時間】
いずれも1日2回公演
(11時・2時)

【場所】
高知県立坂本龍馬記念館

「鏢は知っている!」④

土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会 現代龍馬学会

小島 一男

前回までのあらすじ

名品信家「一心不乱」は忠孝の象徴として山内家豊資公が手に入れ家宝となった。時は移り幕府が弱体化する。豊信は揺れる世相の中で家督を継ぐ。豊信が「一心不乱」の信家を「一心不乱」の宗義として藩工、宗義に写させたのはひとえに山内家安泰を祈ったものである。

(一) 容堂公(豊信)の想い

彼の写した「一心不乱」の鏢は表切羽台左に「七十六歳」、裏切羽台右に「土州」左に「明珍紀宗義」と切銘している。明珍紀宗義(川崎伊六)は慶応3年3月5日、明珍紀宗長(川崎良次)に明珍家を託し世を去った(七十六歳)。「一心不乱」の宗義は鏢は同じ藩工である左行秀の刀と共に、藩の参政である後藤象二郎が容堂公より拝領した。

容堂はこのころすでに、後藤より薩摩の島津久光が、また、溝湖広之丞を通じて長州の木戸孝允がそれぞれ倒幕の意思固しとの報告を受けていた。そこで藩論を「やむを得ず倒幕となった場合は、幕府に味方せず薩摩に同調し、軍事介入も致し方なし」との方向修正を視野に入れた。つづいたものの、やはり根底には「徳川あつての山内家」の思いは強く「徳川家の存続は第

一とする」としていた。容堂はその思いを鏢とともに後藤に授けた。後藤はそれを全身で受け止め、土佐藩のまた、容堂公のため命をかけてその思いに込める覚悟をした。事実後藤はその後大きな働きをすることになる。後藤はその時、吉田東洋以来の富国強兵策をとった。藩命による長崎赴任の直前でもあり武器や汽船を購入した。他藩の志士と広く交流し、土佐藩と幕府の関係を考慮しつつ「藩論」の確定、修正を考えていた。

(二) 後藤象二郎の活躍

慶応二年七月七日、ジョン万次郎を伴い長崎に向かう後藤象二郎の姿があった。容堂公からの拝領刀、左行秀には「一心不乱」の宗義「鏢がかかっていた。一行への土佐藩の期待は大きく、当座の費用として3000両が支給されたという。一行は七月二十六日、長崎に



(画) 和田 通博

着いた。

早速、後藤は行動を開始する。外国商人、ポウドインらの案内で売りに出ている外国汽船を見て回り商談を重ねる。また、目的の一つであったドイツのキネットイル商社との小銃をめぐる紛争も薩摩の五代才助の力を借りて解決した。その功績には薩摩藩より鉄製汽船「胡蝶」を購入して報いた。

八月二十五日には、ジョン万次郎を通弁として清国上海に渡り外国汽船の見識を深めた。その結果、イギリス承認オールト

から「帯木」(はきはぎ)、ドイツ商人アーレンより「空蟬」(うつせみ)を購入し、九月、長崎に帰港した。

後藤は土佐藩の武力増強と、輸出入を有利に導くため「亀山社中」の坂本龍馬に接近し土佐藩の下部組織に組み込もうと考えた。松井周助と龍馬と千葉道場時代(剣術修行)の同門だった溝湖広之丞に命じ、その機会を待った。しかし、それは彼にとって命がけの仕事であった。後藤は文久二年(一八六二)四月八日、土佐勤王党の大石団

蔵、安岡嘉助、那須真吾ら三人によって暗殺された藩の執政吉田東洋の甥であり、また、大監察として土佐勤王党を弾圧し、慶応元年(一八六五)には龍馬の遠縁に当たる土佐勤王党の盟主であった武市瑞山に切腹を命じた本人である。だから、龍馬と後藤はいわば仇敵の仲。「亀山社中」には土佐勤王党の残党もいた。事実、そうした中に「後藤切るべし!」の声は少なからずあった。それだけに後藤の龍馬への接近は、いわば藩のため敵陣に切り込むほどの、武将の覚悟が必要だったかも知れぬと推察する。

立場こそ違え、この感情は坂本龍馬も同様であろう。私情を捨て旧因にとらわれず前途の大局のみを語らねばこの会談は必ずや失敗に終わる。後藤はそう考えたが、これは龍馬も同じだったようである。(次回に続く)

解説

慶応二年七月七日より一年数ヶ月、容堂公より後藤象二郎が拝領した「一心不乱」の宗義「鏢は、後藤とともに激動の幕末を旅し歩むことになる。長崎での「清風亭会談」、紀州藩との「いろは丸」賠償金談判現場また、「夕顔」船中では坂本龍馬と日本の未来を語り合う場面。大政奉還前後の期待と喜びを共に感じた、まさに、歴史の証言者、となるのである。

拜啓 龍馬 殿

214通

平成22年9月21日〜12月20日

ぼくは今べんきようとそらばんとスイミングとピアノを習っています。これからの日本をよくするため、もっともっとがんばります。おうえんしてください。でもまずはうんどう会をがんばります。
 (9月23日 兵庫県 H・K 8歳 男子)

甲府から12時間かけて来たぜよ。来た甲斐があったぜよ。またいつか来るぜ。
 (10月10日 山梨県 K・M 33歳 男性)

今日は主人と二人で来ました。毎週「龍馬伝」楽しみにみています。主人が好きな高知主人が大好きな坂本龍馬。私も好きになりました。また二人で来たらいいな。
 (10月20日 愛媛県 Y・H 51歳 女性)

今、社会で歴史の勉強をしています。私は龍馬さんはずいぶん好きです。高知県にもかかて客の人がきてすごくにぎやかにいからなまで龍馬さんばかりです。私はよさこいで龍馬のメダルをもらいました。一生記念に残しておきたいです。
 (11月5日 高知市 S・H 12歳 女子)

初めてあなたに出会ったのは高専の図書館でした。ヒ

マツぶしに読んでいたあなたのマンガ「お〜い龍馬」に見事にハマり、全巻買った。船中八策(酒)を飲んでみたりと、楽しませてもらっています。あなたを見る度に「自分はこれでよかったのか」「もつと何かができるんじゃないか」と考えてみたり、自分の可能性を見つめることができます。今はただのサラリーマンをやっていますが、これは夢に向かっての1ステップです。私もあなたのように、何かを変えたい！そんな人物になりたいと想っています(エヘンエヘン)。親父の次に尊敬する龍馬殿、今日はあなたに会えてとても嬉しかったです。
 (11月6日 大阪府 T・Y 24歳 男性)

「龍馬がゆく」を読んで龍馬さんと出会ったのが18歳の時、東京に出たばかりのまだ世の中がよくわかっていない頃でした。あれから28年、結婚して子供ができて、もう人生の折り返しを過ぎましたが、「自分の人生とは何か」がよくわかりません。今の夢は子供の成長を見守ることくらいです。龍馬さんのように、自分の夢を目指して大きな人間になってほしいと、龍馬さんにちなんで「龍駿」という名を付けましたが、なかなか思ったようには育ってくれません。でもこの子をしっかりとした大人に育てることを目標として生きています。
 (12月3日 大阪市 K・Y 66歳 男性)

本日、父、兄、私三人で龍馬様に会いに来ました。「高知に龍馬様がいる」一週間前にこちらに訪れ、本日はお手紙を届けた。再訪しました。龍馬様の人生33年、残念で悔しいです。(亡くなっているけれど)目指していた事をもっともつと達成し、今の時代に伝わっていたことでしょうか。33歳までに残した多くの偉業はすばらしく、感動と感謝を一言伝えたく、お手紙を書かせていただきました。又会いに来ますね。
 (12月3日 高知市 56歳 女性)

龍馬殿の人生、生き様、カッとして生きています。ホレました。時代を変えようとするエネルギーを持つ自分も生きていきます。目的は人それぞれ、ただ、自身が納得する人生ってかっこ良いですよ。
 (12月3日 新潟県 Y・T 22歳 男性)

30年前に会いにきました。今日は2度目。朝日を浴び、海を眺めながらちよっぴり龍馬さん気分。先ほど会ってきたあなたの顔が30年前よりやさしく感じるのは、年令を重ねた自分のせいでしょうか？また会いに来ますね。
 (12月4日 名古屋 H・K 51歳 女性)

龍馬の生涯を知り、私も志を持って生きていこうと思えました。龍馬さんの発言や行動力で、多くの人が龍馬さんの力になつてくれたと思います。私も力を貸してほしい人には力になつて

私は33歳の時、米国カリフォルニア州で悪名高いサンクエンティン刑務所へ送られました。そこで見た囚人達の狂暴さに恐れおのき、恐怖のどん底に落ち死を覚悟。それを見た日系一世の看守が本を差し入れてくれました。その本の中の記事に坂本龍馬の記事を見て、心が大いに高揚。それからは獅子奮迅、刑務所内で自分の人生の中であらゆる面で最高の地点に到達し、現在まで元氣

てこれからも頑張ります。子育てが終わったらまた会いに来ます。
 (11月14日 徳島県 A・O 46歳 男性)

私は小学6年の見学にきました。もつと龍馬さんのことを知るためにきました。学校の校歌にあなたの名前があるのでもつと知りたいです。
 (11月19日 高知市 C・N 小6 女子)

りようまさんこんにちは。ぼくはりようまさんが大好きだし、ぼくの家はりようまさんの家となりの家です。高知城にも何回も行ったことがあるし、テレビでも見えています。天国でぼくを見守ってください。
 (11月19日 高知市上町 Y・A 11歳 男子)

りようまさんにやさしい人になりたいです。
 (11月21日 岡山県 K・Y 10歳 男子)

龍馬伝の最終回を昨日みて、つらくて泣いてしまいました。龍馬さんは大事な人だったのに。本当にどうしてしまいました。だから会いに来ました。私は小学校の教師ですが、今年の音楽祭の楽曲はテーマを「龍馬」と決め取り組みました。合奏は「龍馬伝」リコーダー奏にいちむじんの紀行バージョンを取り入れ、斉唱は福山龍馬の「道標」を歌いました。子ども達のメッセージも発表に取り入れました。「泣き虫だった龍馬、弱虫だった龍馬、そんな龍馬が日本を変えた」「ぼくたち私たちが龍馬のように大きな愛をもって進んでいこう」1、2年生が心を込めて言いました。つらい

今の世の中を、少しでも良い方向に動かす行動し、自分にも出来ることのあるのなら、積極的に取り組みたいと思いました。
 (12月7日 愛媛県 Y・Y 25歳 女性)

「龍馬伝」を見て、龍馬さんの生まれ育った土佐が見たくなり、はるばる群馬県からやってきました。この広い海が見える2階からの眺めは壮大で、この海を見て、そしてこの潮騒の音を聞いて育ったから、龍馬さんはスケールの大きな人になったんだと感じました。物事を立体的に、かつ海外からの視点で、持つ海なし県の群馬なので、海の持つ迫力はすごいです。本当に志半ばで倒れられて残念です。ありがとうございました。
 (12月7日 群馬県 I・Y 53歳 女性)

編集者より

「龍馬伝」も最終回を迎え、当館は来年度の開館20周年に向け始動しています。拜啓本第2弾も制作予定です。この一年は、多くの著名人にも龍馬へのメッセージを寄せていただきました。前回とはまた違った充実の一冊になることと思います。このたび、拜啓龍馬殿の投函箱を記念館2階空白のステージにも設置しました。龍馬も眺め、大きな志を抱いたであろうこの太平洋を眺めながら、龍馬へ思いを馳せ、メッセージを残していただければと思います。 尾崎 由紀

ピストル騒動



寄贈されたスミス&ウエッソン

「館長！そんなことしたら銃刀法違反で送検されることになりま〜すよ」。電話の向うの声は半分笑いながら、しかし、一歩も譲らないぞ、いや、譲れまい、そんな自信の声に聞えた。マスコミ報道などですっかり有名になった例の、愛媛県松山市の方から龍馬記念館が寄贈を受けたピストル、32口径スミス&ウエッソンの「展示をめぐる」一幕。

もう、昨年の夏になる。「龍馬伝」フル回転の頃だ。高杉晋作が龍馬に護身用のピストルをプレゼントする。忘れもしない、8月22日放送回であった。寄贈を受けたピストルはその日から展示すると決めた。段取りは着々と進んだ。事前に寄贈手続きも終わり、三日ほど錆びも落として展示した。龍馬が持っていたものと同型ということでそこは人気コーナーになった。レプリカの22口径と並べて、錆びてはいるが本物の存在感だ。

いいスタートの展示タイミングと喜んでいたら。二日過ぎた。と、そこへ高知県警の意思を受けた県文化国際課からのチェックの連絡が入って急ブレーキである。言い訳の理屈を並べようとしたり、冒頭の言葉になったわけだ。展示は1年はかかるだろうと踏んでいた。ところが、うれしい誤算が起きた。国家公安委員長さんが閣議の席で龍馬記念館のピストル展示を認めるようにとの意向を示した、ことで途端に周辺が動き出した。

全国のピストルの実態調査が始まった。「どうすれば展示できるようになるか」。その策を関係者が模索した。それから一ヶ月そこそこ。突然、県からピストル返還の知らせが届いたのである。ただしピストルの発射機能をなくし、管理用に、特別公務員、3人を配置せよとの条件つきだった。発射機能の完全除去は100歩譲って仕方ないにしても、公務員の身分を持ったものがあるというのは、もう一つ納得できなかった。しかし、再展示が最優先である。1ヶ月でスピード再展示となった。

「日本を騒がせたピストル」ひとつ新しいキャッチコピーが付いた。

「1000名バブリックビューイングにチャレンジして」

大きな志は、人を繋ぐ。人と人が出会い、尊敬し合い、信じることで、世の中がちょっと動き出す。

龍馬街道実行委員会 吉富慎作

新年、明けましておめでとうございます。去年11月14日に開かれた、坂本龍馬記念館主催の「風になった龍馬vol.2」シンポジウム&バブリックビューイングに開かれて頂き、新しい出会いと、貴重な体験をさせていただきました。この場を借りて、関わったすべての人にお礼を申し上げます。

ソフトバンクの孫社長、尾崎高知県知事、坂本龍馬記念館館長、坂本家9代目坂本登善さん、勝海舟子孫濱山さん、NHK大河ドラマ龍馬伝鈴木プロデューサーと大友監督、土佐海援隊の高校生、そして日本中から集まった1000名、Twitterと生中継サイト「Strive」の先に、のべ2万人の志士たち。手前味噌ですが、これほど人が集い、あんなに熱い話が聞けるシンポジウムは、向こう30年は無いのではないのでしょうか。

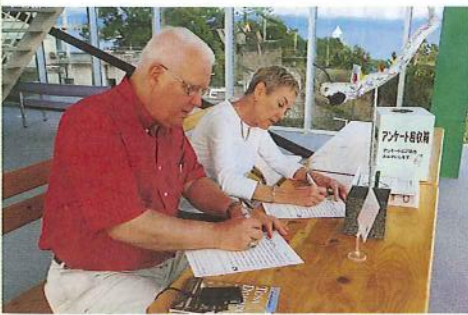
去年の3月に孫社長と龍馬について対談させて頂いた際、「いつか一緒に龍馬伝を見よう」と言って頂き、どうしたら本当に実現できるだろうかと考え始めました。そして「桂浜に大きなスクリーンを立てて1000名で龍馬伝の感動を共有」これしかない。

沢山の方と出合いアドバイスを頂くなかで、妄想が一つ一つ現実のものとなりました。人と出合い、信頼できる仲間をつくることで、夢が夢でなくなり、僕は、人と人を繋げる仕事になりたいという思いから広告やインターネット関連の仕事に12年以上しており、デジタルなコミュニケーションを生業としています。ですが、何かを成し遂げるための信頼できる仲間は、やはり人と人のリアルな出合いから始まります。つまり、



大型スクリーンが迫力の会場(かるぽーと)

風になった龍馬VOL.2 子孫が語る「咸臨丸」渡米150年・太平洋横断秘話



龍馬へのメッセージ「拜啓龍馬殿」を書く
ジョージ・ブルック夫妻＝龍馬記念館で

勝海舟やジョン万を知っていたブルック大尉

企画展「風になった龍馬 VOL. 2～時代の力」オープンの翌日11月15日、ブルック大尉のひ孫ジョージ・M・ブルックさんの講演会を高知会館で開催した。

今から150年前、日米修好通商条約の批准書交換のために、日本人は幕府の軍艦「咸臨丸」という蒸気船で初めて太平洋を渡った。勝海舟は咸臨丸の艦長として、ジョン万次郎は通訳として乗船していたが、暴風雨に遭うなど航海は難航した。そのとき日本人の大きな力になったのが技術アドバイザーとして乗り組んでいたアメリカ海軍のブルック大尉だった。

ジョージさんはブルック大尉のひ孫で、曾祖父ジョン・ブルック大尉の経歴、大尉が日本に初めて来たときのこと、1860年咸臨丸の航海に参加するようになった理由や実際の航海の様態、遣米使節団がサンフランシスコ到着時のことやその後のブルック大尉など、ていねいに話を進めた。高知市出身でジョン万次郎研究家である北代淳二さんが通訳にあたった。

ジョージさんによると大尉の残した日記の中に、「勝は鋭く、人の心を見透すような目の持ち主。非常に抜け目なくて、頭の回転が早く、知力のある男」だと評し、「現存する誰よりも、万次郎が日本の開国に貢献したと確信した」と書いている。また、文化の違いなどから衝突することもあった日本人について徐々に理解を示し「日本人が複雑な操船法と技術を学ぶ早さに驚いた」ともいう。

航海中、日本士官は夜中に間食を取るのを好み、甲板にマットを拡げて火鉢を持ち出して魚や米や菓子を熱いお茶を飲みながら食べていた話など、定員の150人を超える聴衆はうなずいたり笑ったりしながら興味深く聴き入っていた。 前田 由紀枝

「田中浜、桂浜に舞い降りる」

2010年10月31日の夕暮れ、雨が降る桂浜。松明の炎がゆらめく静けさの中で息を潜める。観客が見つめる先には4畳半の仮設舞台が踊り手を待っていた。静かに現れたダンサー田中浜さんは、象牙色の着物に深い青緑の衣裳、そして空気もまとい踊り始めた。まるで海に呼ばれているかのように、波打ち際へ歩み寄ってゆく。

果てしなく広がる紺鼠の空と紺青の海に向かい、孤高の舞を見せる田中さんの踊りは、桂浜の海・空・雨そして大地と対話をし、体内から自然と湧き出てくるエネルギーがイメージーションとなって表現されているように思えた。

引いては押し寄せる海水に身を投じ、一心不乱に踊り続ける田中さんの息遣いが、波音と雨音に入り混じり、伝わってくる。それは私の顔に滴り落ちる雨粒の冷たさも忘れてしまうほどの気魄の世界だ。

刻々と空模様に変化してゆき暗闇が増してゆく中、目を凝らし彼の姿を追ってゆく。糸、糸が脱ぎ去られ、ダンサーとしての田中さんの肉体が際立つ。

その姿は、過去から永遠と続いてきた海・空・大地・幕末をも越え、今につながるこの時と空間で踊る彼の魂が、「龍馬伝」で演じた吉田東洋の体内を通り過ぎ、ここへ舞い降りて来たような感じさえた。

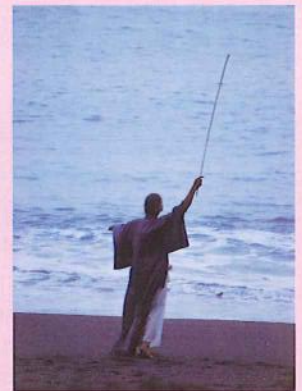
何かのインタビューで「自分がつきあっているこの命は一体どこからきたのかということに興味がある。」と田中さんは答えていた。この言葉の意味がそこにあるのかもしれない。

結局、最後まで仮設舞台で踊ることはなく、観客の意表を突いた。45分間の独舞の緊張感から解放された田中さんにお伺いした。最初から舞台で踊るつもりはなかったのか、それとも踊っている中でそう決めたのかを。

「思うがまま、浜で踊りたくなった。」優しく答えが返って来た。私は直感力と少年のような純粹さを彼に感じた。

公演後、私は田中さんが踊りの中で突然砂浜に穴を掘り、パフォーマンスを行ったその穴に身を屈めてみた。なぜか舞踏家土方巽を彷彿とさせるものがあつた。そして田中さんが土方を私淑していることも実感した。

ダンサー田中浜さんの気骨と存在感が、役者の顔も創り上げているということを感じ、本来の彼の生き方を思う存分知ることができた公演だった。 中村 昌代



波打ち際に踊る田中浜さん(桂浜)

入館状況

2010年12月20日現在(開館以来6,932日)

- ◆総入館者数 2,884,978人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2010年度最多入館(2010年5月2日) 6,686人
- ◆2010年度最少入館(2010年12月16日) 222人

編集後記

慌しい一言ではとても片付けられない一年が過ぎた。「龍馬伝」効果というか旋風というか、飛騰もそれに追いまわされた。ページが足りないほど記事ねたは多く、出来る限り掲載を心がけたが、それでも落ちていったニュースも少なくない。今年は、開館20周年というさらに大きなテーマを抱えている。決まり行事、企画が新年から並ぶ。旧年以上によりハードな年になりそうである。一年を振り返るといふより新年への心構えの気持ちが強くなった、ならざるを得なかった「編集後記」となりました。(モ)

館だより「飛騰」第76号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2011(平成23)年1月1日
発行 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

未来に向う「龍馬魂」出逢いの不思議

小寺 規雄

きつかけは祖母の遺影

今年の高知県立坂本龍馬記念館20周年を祝うかの様に昨年は福山雅治演じる「龍馬伝」が放送され、大きなうねりとなり全国を駆け巡った。小生もそのうねりのなかにいた。

小生は、1968年9月29日兵庫に生まれた。その日は大政奉還を英断した徳川第15代将軍徳川慶喜侯と同じ誕生日である。そしてこの年に大河ドラマ第6作目「竜馬がゆく」が放送された。時は明治百周年を記念して制作された大河ドラマ初の司馬遼太郎原作ドラマであり、近代日本の扉を大きく開いた青年「坂本龍馬」の生涯を描いたものであつたらしい。小生は見ていたかもしれないが、当然記憶には無い。小生にとって記憶にも残る「坂本龍馬」の生涯を描いた大河は昨年の「龍馬伝」が最初である。その「坂本龍馬」という人物を本当の意味で意識するようになったのは、恥ずかしながら大学生の時だったと記憶している。当時祖母が亡くなり、遺影写真には家紋付きの着物を着ている祖母がいた。涙ながらに小生はその遺影写真をずっと見ていた。

その時、どこかで見たことがある家紋だと……。悲しさと寂しさと同時に無性に先祖への尊敬の念と有難さとして家紋のルーツを知りたくなつた。

祖母の死が小生に先祖を敬う事を始めて教えてくれたのかもしれない。父に「この家紋は昔からなのか？」と聞いた。小生の家紋は桔梗紋である。父の話のよると先祖が明智家から頂戴した大切な家紋とのことであつた。小生は家中に目を向けた、今まで気にも留めていなかった蔵に行つた。

蔵の中には古めかしい桔梗紋が描かれている提灯やら提灯を入れたケースや屏風等が出てきた。それだ。この家紋は幼い頃耳にしてきた「坂本龍馬」とどこかで縁があるかもしれない？と考へ始めた。「坂本龍馬」はご存知の通り、文久2年3月24日に土佐という今で言う「国」を脱藩した。この覚悟がそれほどまでのものなかの。龍馬が何故脱藩という手段を選らんだのか。

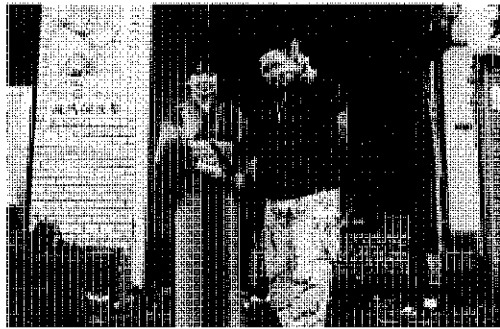
これは小生の私見なので、お許し頂きたい。それはまさしく「出逢い」がきっかけである。文久2年1月15日長州の久坂玄瑞と面談をしている。その時に龍馬は大きな衝撃を受けたのだと思う。「大義の為なら貴藩も弊藩も滅亡してもかまわない」龍馬にとってこの言葉は龍馬自身が新たなステージの扉が開いた瞬間だろう。この扉が開いた瞬間、龍馬は土佐から日本を見る「龍」になったのではないか。ある種出逢いとはその人の人生を180度変えてしまうほどの影響力があり、潜在的に「常識であつたことが常識ではないかも」と思えるようにさえる。

そして、小生は「坂本龍馬」とことごとく知りたと思つていた。2010年の夏には既に大河「龍馬伝」絶賛放送真盛りであつた。そんな折に坂本龍馬の絵本山でもあつた。高知県立坂本龍馬記

金に輝くプレート

念館」が実施している「龍馬検定」なるものを発見した。検定は、初級・中級・上級とあつた。中級以上は検定料が必要だが、初級は無料。小生は、先ず、初級は100点が取れるであろうと受験してみた。結果は恥ずかしながら、60点超えたくらいで小生にとつて屈辱的な数字が目飛び込んで来た。中級以上の合格者は高知県立坂本龍馬記念館にネームプレートが貼り出される。坂本龍馬記念館に自分の

から始まつた。何冊か書籍を購入し、「坂本龍馬」の勉強というより新たに研究をし直したという方が的確である。しかし、この「坂本龍馬」という男は大変なものである。約140弱ある現存する手紙を解説するのも大変であつた。また、「運の手紙」ことに必ず龍馬を取り巻く環境がバックヤードにある。また龍馬の手紙にはユーモアと優しさと思志の固さが手に取るように見える。送り主によつて文体も変えている。既成概念に全く捕らわれない。時には本文より追伸が長いものさもあるのだ。文を読めば人物が窺えるというが、まさに龍馬はその通りである。そして8月14日、小生に金に輝く「小寺規雄(沖繩)」というプレートを貼つて頂く事ができた。



谷口さえ子さんと著者

この作業を通じて「生涯の財産ができた」と思つている。「坂本龍馬」が縁で出逢つた方々とお付き合いの開始である。ご本人に了解を得ているので紹介したい。先ずは、昨年多忙を極める中走り続けてこられた高知県立坂本龍馬記念館の森館長を筆頭に記念館の皆様(特に森館長は小生の事を沖繩から虎が来るぜよと言つて小生を警戒されている(笑))。そして龍馬街道の吉富氏(彼は未だ恐ろしい魂を持つている福岡の奇才である)そして、昨年は二年最も出張に行かれたのではないであろうか「主婦の友社」の「RYOMA」編集長であるその名も坂本龍馬氏として、高知にこの人住らだと実感した女性、谷口さえ子さん(彼女は初めて

「愛」ならばそれは「愛」

達つた方をご自分の車に乗せて龍馬縁の地を案内する素晴らしい方です)。まだまだ、ページが何枚あつても足りない程の縁があつた。「坂本龍馬」の研究をするようになり、人生において一番大切な事を教えて戴いた気がする。それは一言で言うならば「愛」である。彼の行動や手紙には私利私欲が無く、全て国を愛し、仲間を愛し、家族を愛し、人間を愛していたと思う。

必ず未来に向かう「希」

このつたない小生の文で恐縮ではありますが、皆様の隣の方、家族でも職場仲間でも恋人、友人でもいい。1度手と手を握つてみませんか。そのお互いの手と手の空間には必ず未来に向う「希」があります。その「希」は必ず世界の人が握手をする第一歩だと思つたのです。さあ、手を握つて一緒に一歩でもいいです前に踏み出しましょう。

世界の皆様笑顔で暮らせる世界の為に。「坂本龍馬」の心を四季に沿つてご紹介します。

人に接する時は、暖かい春の心。行動をする時は、燃える夏の心。考える時は、澄んだ秋の心。自分に向かう時は、厳しい冬の心。最後になりましたが、このような記念すべき年の始まりに未熟な小生にペンを取らせて戴いた坂本龍馬記念館森館長並びに皆様に厚く御礼申し上げます。





「話題人」インタビュー

「新しい龍馬を“創る”！」

シナリオライター 福田 靖さん (大河ドラマ『龍馬伝』脚本家)

【インタビュー】
渡辺 瑠海



大河ドラマ「龍馬伝」が終了した2010年11月、すでに脱稿し最終回の撮影を終えた福田靖さんがふらりと記念館を訪れた。「龍馬伝」執筆前の取材で来館して以来、じつに2年もの月日が流れていた。

龍馬は「エンターテインメント」だ

Q 「昭和43年放送の司馬遼太郎の『龍馬がゆく』ではない龍馬をやること」
福田さんの中には3つの龍馬があるという。資料を調べていく中でイメージする本当の龍馬「世の中の日本人が愛し続ける司馬遼太郎さんの創った『龍馬』」そして今回の「龍馬伝」の龍馬。まさに「エンターテインメント」を創る主人公としての坂本龍馬「だけ」を考え続けた数年間だったという。

Q 「龍馬が行く」とまったく違う「新しい龍馬」の執筆に携わった数年間の福田さんのプレッシャーは計り知れないものだったと思いますが、やっと思つてくれましたか？
「今はすべて終わってやりきったという充実感、そして虚脱感がありますね。でも仕事から解放されたものすごくリラックラスしてますから大丈夫ですよ」

Q 「史実と違う」と言われることも多かったと思いますが、史実に重なりつつオリジナルストーリーを作るのは大変ではなかったですか？
「うん、その『歴史と違う』という言葉が曲者で、僕は脚本が『歴史と違う』とは思ってないんです。もちろん、時には史実を端折るはありますが、歴史的事実をまっとうく違う風に向けて描くのは極力避けたいし、それはやっています。僕自身、大河ドラマはエンターテインメントだと思っています」

ライバル関係になって、龍馬は弥太郎の堪忍袋の尾をさかすかに、いちいち切らせるような役で、弥太郎が龍馬を罵倒し続ける人生が延々と続く(笑)」「
「そう来ますか(笑)」

「ただ、冷静に考えてみたら、やはり彼はあそこで死ぬかなかったのかなあ……死んだからこそ、今の龍馬があるのかなあと思ったりします。うーん、これはなかなか難しいけど、僕自身、ト書きに「息絶える龍馬」と書いた瞬間はやはり、かなりしんみりしました。
最終回の撮影の日、近江屋で昼ぐらいうまで弥太郎さんのシーンを撮影して、そこから龍馬の撮影、暗殺シーンは多分朝の5時から10時くらいと言われたので、僕は1度家

「描き切れぬほど龍馬は大きい」と語る福田さん(龍馬記念館)

エンターテインメントとは大きな嘘をついて、細かいディテールは正確に、というのが鉄則ですからね(笑)。

実は「龍馬伝」を書くにあたっていろいろ調べていくうちに、「司馬さんのこのシーンはここから引張ってきたのか」とか、「ここ」を組み合わせたのか」とわかって面白かった。ああ、これはやはり、小説だったんだと冷静に見られるようになりましたね。しかし、じゃあそもそも日本人が持つ「龍馬のイメージ」で自由で何ものにも縛られず、時に無作法だけど愛される人柄、というの、あれは司馬さんが創ったキャラクターとしての主人公なんですよ。昔、館長さんがおっしゃっていましたが、来館者に「お田鶴さまとはどういう方ですか？」と尋ねられて、それはフィクションですから実在しませんよ」とびびりするし、「じゃ、寝待彦兵衛は」と言われて「そういう人もいません」というと更にびびりされる(笑)。司馬さんの創ったキャラクターなんですよ」

Q 「龍馬伝」では最初福田さんと龍馬のイメージが合わず、私はちまうと戸惑いました。でも、回を追うごとに龍馬は骨太になり、第三部からはすっかり違和感がなくなりました。これは狙っていたんですか？
「そう、まさに、狙いです(笑)。主人公のタイプには二通りあるんですよ。水戸黄門とか古畑任三郎みたいに毎回同じですと変わらないのが魅力の主人公、そして、『巨人の星』や『エースを捕えろ』みたいに成長していく主人公。『龍馬伝』は1年間かけて成長していく龍馬を作るのがスタートラインでした」

もともと龍馬の先祖は商家で、お金で武士の身分、侍格を買ったわけだから、ことさら、人に後ろ指さされないよう、しっかりしなさいと教えられたはずなんです。そう考えると無作法で豪放磊落な、従来

に帰って、夜中の3時ぐらいにスタジオに行つた。すると、もうスタジオに入ったときから、あたりが異様な空気なんです」

「異様な空気？」
「スタジオがシーンとしてる。モニターを見ている人が誰人しやっついてない。あ、撮影が始まるまでと思つてふと見ると、すでに龍馬が血まみれになってる。撮影を終えた香川さんもみんな現場に残つて、龍馬が息絶えるまで腕を組んでじっと見つめている。その情景も含めてすべてがなんともいえないものでした」

でも、ある意味、龍馬は解放されたのか、なとも思いましたね……。なんといえはよいのか、彼の最後は生き急いでいるとは言わないまでも、二人の人間が背負う仕事としては大変重い、目一杯の活躍だったと思うんです。そこで解放されたのは本当に悲しいけど、一方で彼は解放されたんじゃないかなと思うんです」

脚本家としては、1年間愛してもらったキャラクターを最後で殺す、しかも、いきなり踏み込まれて殺される、これは交通事故みたいなもので、難しいうらドラマです。お客さんが観終わった後に、「いやあ、面白かった」という気持ちになる種類のドラマではなく、むしろ、終わったとき「えい、そりやないだろ？」っていわれる種類のドラマです。僕はこういう種類のドラマは初めてでした。龍馬暗殺の喪失感から次の希望につながる仕掛けをする必要があった。「龍馬伝」では、弥太郎が龍馬の死をどう受け止めるかが従来とは違う新しい部分です」

Q 「龍馬伝」では女性たちの役割もとても大きかったですね。
「ええ。幕末ドラマはとすると出てくるのが男ばかりになるので、女性キャラクターをしっかりと描きました。たとえば加

の龍馬ではなく、むしろ普通の少年だつたのではないかと僕は解釈した。ごくごく普通の穏やかな青年が成長していくというコンセプトの上では、福山雅治さんの演じる今までのと違う、龍馬には確信がありました」

脚本と演出のはざまに生まれる新しい龍馬

弥太郎視点から龍馬を描くというアイデアは斬新でしたか。
「龍馬がゆく」とは違った視点を探しているうちに、岩崎弥太郎という人物を、発見してピンとききました。龍馬と同時代に生まれた土佐の人で、龍馬とは記録上では土佐商會と海援隊という関係で、龍馬が亡くなった後であらうとのし上がったきて、まさに龍馬がやろうとしたことをやっっていく人物」

弥太郎はすごく頭のいい人だたそうなんですけど、龍馬よりも身分の低い家に生まれて、ずっと小役人で、そういう環境の人がもしボソンの龍馬と知りあいたつたら、多分頭にくるだろうなと思つた(笑)。本当にこの二人は『アマテラス』のモーツァルトとサリエリのような関係です。このアイデアが思い浮かんだ時点で、よし、何かできるぞーと思つきました」

しかし、弥太郎の背負っていた鳥か「はす」が、つたてたすね(笑)。「あれは現場の意向でしょう(笑)。僕自身、弥太郎があそこまで汚れているとは思っていませんでした。台本上はあんなに埃まみれなんて書けてないですよ。もちろん、鳥かごを背負った人間がやってくる」とは書きましたけど、あれじゃ、鳥かごがやってくる(笑)ですよ(笑)。多分、弥太郎が後々偉くなるのはわかっているから、極端なところから思いきりやっやっやっという監督と香川さんの意向だと思つた(笑)」

Q ドラマの中で福田さんが最も気に入っているシーンは何ですか？
「それは、長州藩の役割も綿密に描かれていましたね。それは同じ、長州人として思い入れが強かった。いや、長州をどうしようかって描いていくと、必然的に長州のポジションがドラマ全体の中で非常に大事だと気づいたんです。薩摩と長州で幕府を倒すといっても結局西郷さんにはだめになるし、そこで長州藩の底力が見えてくる。高杉が死んでもペーペーだった伊藤俊輔やら誰やらとどんでくるという層の厚さは、やはりすごいんですよ」

山内容堂公も強烈なインパクトがありましたね。
「容堂公は例えるならば、ダース・ベイダーです。脚本に近藤正臣さんのお芝居と演出が加わり、どんとスケールが大きくなつていった。年齢設定をあえて上げて、全体的に黒っぽい衣装の人たちの中でひとり純爛豪華な衣装で、空恐ろしい、底の知れない絶対的な人物として描くと、ああなりました。近藤さんが『大河』には今までの6回出たことがあるけど、大河の仕事っていうのは単調で、役者の仕事としてはとてもつまらない。でも今回の『龍馬伝』だ

入っているシーンは、「長次郎が死んだときは、長次郎の写真と一緒に龍馬が酒を飲むシーン。あのシーンの福山君がものすごくよかつた。まるで福山君に龍馬がのりつづついているように見えた。あのボンボンだった男が成長したということも全部含め、いろんな意味で役者としても素晴らしい演技でした。あの龍馬の顔は良かった」

Q 福山雅治さんは龍馬を演じて何が変化があったように見えましたか？
「もう、彼は昔とは全然違った顔になりました。福山さんは4年に1回しかドラマに出ない人で、僕が彼をかつているのは、彼のキャラクター以上に、音楽は自分の好きなようにやらせてもらうけど、芝居に関してはそうじゃないので言つてください。という、福山さんの謙虚な姿勢なんです。ですから最初の頃は、手取り足取り細かく芝居をつけてやらなきゃいけない、とか、龍馬だけに負担にならないよう、なるべく台詞を減らそうとか、そこまで考えていたんですが、撮影が始まると完璧。これは香川照之さんが共演だったのも大きくて、そこから福山さんはみるみるうちに覚醒しました。なんといつても1日の間に、福山雅治でいるよりも、龍馬でいる時間の方が長いんです(笑)」

Q もし龍馬が暗殺されずに生きていたら、福田さんはどんなストーリーを考えますか？龍馬はその後どんな人生を歩くのでしょうか？
「ハハ、お龍とうまくいかないというのはちよと夢がないので、何とかうまくいってほしいですね(笑)。そうですね、龍馬はひよとすると、なりましたかたのこともしれないけど、政治家にはならなかつたと思うし、多分無理だと思つたりして、やっばり商売してるとんじやないでしょうか。弥太郎とは今以上に血で血を洗う争いをしていくかも。もう、シャレにならないくらいに

けはほんとに楽しかった」と言つてくださった(笑)」「
「ドラマを見ていても役を楽しんでいるのがわかります」

「ええ、まさにそうなんです(笑)」
Q しかし、龍馬のお母さんとお登勢さんが「二人」役なのはどうしてですか？
「あれは、最初草刈民代さんをお母さん役で口説くときに、第話で終わるのも何だから、寺田屋のお登勢は龍馬の大阪の母親のようだというようなイメージで配役したと思うんですけど、僕は草刈さんの「二人」役を了解したものの、いざ龍馬がお登勢に会うシーンを書き始めると、顔が同じということを龍馬が不思議に思わないはずがない」としばらくそこに縛られてしまつてしまいました(笑)。だつて普通で、たまりませんよ(笑)」

「実際に母親とまったく同じ顔の人に会つて疑問を抱かないはずがないですよ(笑)」

「そうですね……そうですね……。(しばらく考え込んた)」
「あなた、命を使いきつたなと。ええ、これ『龍馬伝』の最後の台詞にも出てきますけど、君は十分、命を使いきつたねと言つてほしい(笑)」

「それは、幸せなことなんじゃないですか？」「それは幸せなことですよ。僕が思うに、それはとても幸せなことですよ。龍馬は幸せな人生だったと思つています。だつて、まさかこういう風に自分のことを語り継がれているわけですから」

「ほれ話」

―犬歩轉当記(四)―

「浪華のことも夢のまた夢」

京都国立博物館 宮川 禎一

「龍馬の手紙は歴史的である以上に国語的(文学的)に読むべきだ」とは筆者の持論だが、では本当にそう読まないのか? そんな試題だ。

龍馬が「正月廿日夜」と日付した春猪あての手紙(北海道坂本龍馬記念館蔵)を従来の慶応二年(月)ではなくて二年前の慶応二年(月)二十日夜、すなわち薩長同盟密約の会議前夜に書いた、としたのは筆者である。春猪に酷い悪口を書いたのもその日の龍馬のストレスを解消するためだ、との解釈である。それはそうとして、手紙の末尾に注目すべき遺書のような文章が見られる。

「私ももし死ななかりや、四五年のうちには(土佐に)かえるかも。(しかし)露の命ははかられず、先々(春猪は)ごまじでおくらしよ。」

ずいぶん文学的を表現だが、「私龍馬の命は草の葉に付いた朝露のようなもの。何時はかなく消えるかもしれないよ」との意味である。「露の命は、はかられず」は七五調なのでより文学的なのだ。実際、慶応二年(月)の京都は龍馬にとつて大変に危険であった。この手紙を書いたわずか三日後に伏見の寺田屋で尊皇に襲われ、死にかけたのだ。

ごく最近気づいたのだが、この龍馬の遺書めいた文学的表現には本歌があったのではなからうか。

「露と落ち露と消えにし我が身かな浪華のことも夢のまた夢」

そう、豊臣秀吉の辭世の歌である。私が見た人なので気づくのが遅かったのだが、江戸時代人にはこの本歌は常識ではなかつたのだろうか。あの天下人秀吉さえ自身の命を「露と消えにし」と表現しているのである。

龍馬の手紙でもうひとつ。慶応二年十二月四日の兄権平あての手紙(写のみ伝来)の中で池内蔵太の遭難死について悼んで「人間の一生実には積夢の如しと疑ふ」と記している。これは「平家物語」でもあるし、信長の故事でもあるし、秀吉の辭世にも通じている。坂本龍馬の文学的素養(江戸時代的な歴史の素養)の端が表れているのであろう。即物的ではなくじつに文学的だ。若い頃から和歌に親しみ、自ら和歌も多く残している龍馬らしい表現だ。坂本龍馬が明治時代まで生き延びた理由を「何をしていたか?」とはよくある話題であるが、案外、小説家になっていたのかも知れない。

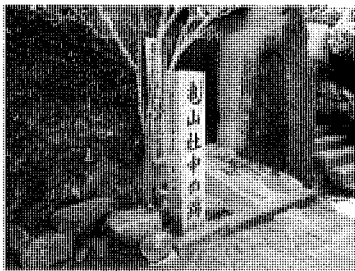


豊臣秀吉を祀る徳国神社の唐門
(国宝、伏見城の門とされる。京都市東山区所在)

コラム・龍馬のこと

検証・長崎の龍馬伝説 ―龍馬は「亀山社中」を創設したのか?―

亀山社中は活かす会幹事
織田 毅



今、長崎はNHK大河ドラマ「龍馬伝」のおかげで、空前の龍馬ブームである。その中で耳にするのは、「龍馬は長崎と深い関係がある。なぜなら、龍馬が長崎に亀山社中を設立したから」という趣旨の発言。確かにこれは通説のようで、『坂本龍馬事典』にも、亀山社中とは「龍馬が慶応元年閏五月ごろに組織した浪人結社」とある。だが、筆者は最近その説(以下「龍馬創設説」と略)に、やや疑問を抱いている。その理由を次に述べたい。

まず、龍馬が残した記録(手紙等)によって、慶応元年5月〜閏5月ごろの行動を見てみよう。この年4月25日に大坂(薩摩藩船で)出航した龍馬は、5月1日に鹿児島着。5月16日には鹿児島を出発して、23日に太宰府に着く。28日に太宰府を出て閏5月1日に下関着(「坂本龍馬手帳摘要」)。そして中岡慎太郎の日記によれば、閏5月29日に龍馬・中岡は下関から京都に向かっていく。長崎に行った記録はどこにもない。

さらに、龍馬は手紙で当時の行動をこう書いている。「龍馬下春江戸より京ニ上り夫より蒸気の便をえしより九国(九州)ニ下り諸国を遊び、下の関ニ至る頃、初五月十日前なりし(中略)龍馬此地(九州及び下関?)ニ止ル前後六十日計ナリ(慶応元年9月7日)。やはり、長崎はでてこない。

また、別の手紙ではこうある。「私共とともに致し候て盛なるハ、二丁目赤づら馬之助、水道通横町の長次郎、高松太郎、望月ハ死タリ。此者ら廿人斗の同志引きつれ今長崎の方ニ出稽古方仕り候(慶応元年9月9日)。これを「亀山社中」の創設を知らせたもの、とする人もいるがそうではない。なぜなら、「廿人斗の同

志引きつれ…」の主語は龍馬ではなく、新宮馬之助たちだからだ。それでは、この時龍馬は何をしていたのか。

それは同じ手紙の少し後の箇所に書かれている。「私しハ一人天下をへめぐりよるしき時ハ諸国人数を引つれ一時にはたあげずべしとて…」。

龍馬は長崎に行った同志とは別の場所で、別の活動を単独で行っていたのだ。龍馬がこうに書き分けているのは興味深い。

そして、もう一つ言っておきたいのは、「龍馬創設説」が、昭和に入って主張され始めたことである。これは、平尾道雄先生の名著「坂本龍馬 海援隊始末」(昭和4年)がもとになっている。この本の中で平尾先生は、「一行は小松に同伴し、同地の亀山に宿所を構え、こゝを本拠として、航海に携はる事となった。(中略)長崎の本拠が亀山だから、称して亀山社中と云ふ」と書かれている。「一行」とは、前5行目に「龍馬等の一行」とあり同じ意味ととらえられる。この記述が「龍馬創設説」を生み「亀山社中」という歴史用語を一般化させたのではないだろうか(ちなみに最近の論考では、「亀山社中」という言葉は使用されない)。それをさらに広めたのが、司馬遼太郎作「竜馬がゆく」であった。ただし、先生はその後の著作(『龍馬のすべて』(昭和41年))で、「龍馬の同志たちは別行動をとって長崎へ出た。(中略)長崎では亀山という場所に宿舎を設け、航海業に従事することになったのである。社中というのがそれだった」と書かれている。

龍馬が社中を創設したのではなく、リーダーでもなかったとすれば、真のリーダーは誰だったのか。それは薩摩藩家老小松帯刀ではないかと考える。しかも社中隊士たちも小松の家来として活動していた形跡すらある。龍馬が指揮・監督していなかったからこそ、近藤長次郎の自刃という悲劇が起こったのではないか。龍馬が、「己れがおったら殺しはせぬのぢやつた」と言った(お龍の回想)のは、そうした社中の実情を物語っているようだ。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp